

## 地中海文化圏の諸問題について —社会的考察

J. オリーベス・プイグ（社会学博士）  
バルセロナ「ポンペウ・ファブラ」大学講師

SOBRE LA PROBLEMÁTICA UNIDAD DEL ÁREA CULTURAL DEL  
MEDITERRANEO  
Un enfoque sociológico

por J. Olives Puig  
Profesor de la Universidad “Pompeu Fabra” de Barcelona  
Doctor en Sociología

山中和樹

### 訳者前書き

本学人文学部環日本海文化学科では環日本海文化を研究することをその趣旨としているが、環日本文化圏の研究に際し、地中海文化圏に関する研究もその一助になるのではないかと考え、上記の論文を訳出した次第である。この翻訳が研究に資するところがあれば望外の喜びである。

地中海地域の諸国家は太古の昔から現在まで、少なくとも西洋の歴史が始まって以来、つまりエジプト、ペラスギ、フェニキア、カルタゴ、ギリシア及びローマで偉大な文明が栄えて以来、歴史上非常に重要かつ複雑な意義を有してきた。この地中海地域はそれ以前にも文明が栄え、現在にもその痕跡をわずかにとどめている。ローマ人が「マーレ・ノストルム（われわれの海）」と呼んだこの内海を西洋文明の発祥の地、またそれぞれの時代においてさまざまな文化が融合して新たな文化が形成されたるつぼとして論じるのは刺激的なことである。しかしながら、現在ではかの地が文化のつぼであるなどという主張は今や真実とは言えず、過去の学者もだれひとりとしてそれに疑いをさしはさむまい。現代世界において地

中海は相反する二つの意味を持っている。まずその地域は文化的観点からすると今もなお重要な地域であり、象徴的な意味においても風光明媚な点においてもオリジナリティーに富んだ芸術が多く見られる点においても考古学的観点からも伝統的な風俗習慣の点からもこの地域が注目に値することは衆目の一致するところである。しかし同時にこの海は今日、異文明間の境界であり、この海の南北で経済発展の度合いも異なっている。つまり大まかに言うとこの海は北の豊かな国々、いわゆるヨーロッパ共同体の国々と「第三世界」という不名誉なレッテルを貼られた南の国々とを隔てているのである。また、ここでは民族間の対立も国家間の対立も尽きることがない。この海はまた西洋（オクシデント）と東方世界（オリエン）を隔てているので、両者のメンタリティーや生活様式の違いがことごとく民族間及び国家間の対立の様相を複雑なものにしている。それどころか地中海は現に最も戦争の危機をはらんだ地域で、西洋だけでなく全世界の安全が問題になっている。つまり、これは石油の生産と分配にかかわる問題であり、アラブとイスラエルの対立である。ごく最近までそこは二つの大きなブロック、米ソ間の緊張の直接的脅威にあり、いわゆる「第一」及び「第二」世界の境界であった。その結果今日でもいまだにハイテク通常兵器をはじめ各種兵器が地中海の沿岸や島の基地に多数配備されている。ロシア・ソビエト帝国が崩壊した今日、地中海は沿岸のいくつかの国、例えば旧ユーゴスラビアやレバノンの民族主義及び国家主義勢力の間の戦いの場になっているし、イスラエル周辺の抗争についても前述のとおりである。また、モスLEM文化諸国の強硬派の間には「原理主義者」と呼ばれる狂信的な一派も台頭し、それがその地域の脅威にもなっている。これに加えて地中海諸国の制度的ダイナミズムに多少なりとも起因している抗争もあるが、そのいくつかの側面については以下で扱う。しかし、このような悪条件下にあつて「そもそも地中海文化というようなものはあるのか」という疑問、別の言葉で言うと「今日地中海世界があたかもひとつの文化に属するものであるのかのように語ることができるのか、またもしそうなら、それはどの程度であるのか」という疑問は充分うなづける。この疑問にそつて以下のページで議論がなされることになる。

まず最初に地中海地域にとって最も重大な対立、この地域で特に際立っている対立について考察しよう。この種の対立はこの地域に特有のものというわけではなく、むしろ現代文明に特有な全地球的なものである。さて、まず第一に豊かな国と貧しい国との間の対立、すなわち先進国と発展途上国との間の対立が現出している。先進国は地中海の北岸に、途上国は南岸にそれぞれ位置している。例外はアルバニアと旧ユーゴ諸国で、北岸にありながら経済的及び社会的、政治的にも発展段階が低く、北岸諸国の間では他の国々との違いが大きく、それゆえ途上国に分類される。この他にトルコとイスラエルが問題になるが、これらの二つの国はさまざまな理由から「第一世界」と「第三世界」の中間にあるものとみなすことができる。このようなレッテルはわれわれが言及している対立の別名でもあり、この対立はさまざまな科学的及びイデオロギイ的観点から分析されてきたが、これまでに明快な結論を得た

わけではない。というのは、おそらく経済発展そのものにつきものの矛盾が問題にされているからである。この点において、経済発展の理論的根拠となった自由主義理論は、国家の富が極限まで成長していくことが「自然」な均衡状態及び万人の利益にかなう状態へとつながるとしているが、この理論はまだ実証されてはいない。むしろその逆を信奉している学者やアナリストの意見の方が優勢になりつつあるようである。つまり、一方で富が蓄積されると他方で貧困も同時に進行するようである。これが第一の大きな対立であり、特に地中海地域で顕著であるが、このことについてはいくらかなりとも明らかにされよう。この地域には飢餓、衛生状態の劣悪さ、大都市のスラム化及びそれに伴う心の貧困、社会的不正義やあらゆる種類の不正などの生存にかかわる大問題を抱えている国々がある一方で、ヨーロッパ共同体に加盟していて、この種の問題とは無縁ではあるが、経済先進国特有の「豊かな社会」を蝕む問題を抱えている国々がある。

地中海地域に見られる対立の第二のものは、前述の第一の対立とも関係するが、政治構造の強化にかかわるものである。これは内部ダイナミズム及び各種の国家間の結びつきによってなされているが、後者は現代世界においてますます欠くべからざるものになりつつある。とりわけ民主国家の政治モデルを社会的に未発達な（つまり、連帯して行動する習慣ができていない）国にそのまま適用しようとする、大きな困難に直面する。このような社会的に未発達な国民の多くの間にはいまだに伝統的な神話の象徴的または魔術的宗教的メンタリティーが根を張っている、生来合理的現世的精神を備えていて、それから逃れることができない国に特有の合理主義的図式に彼らをはめ込むことはできない。ヨーロッパ植民地主義から生み落とされ、たいていは独裁政権によって強制されるこの合理主義的図式を適用しようという「西洋崇拜主義的」意図は、それゆえ硬直的であり、脆いものであった。その結果、不正義や合法性の欠如や政治的不安定などの問題を抱えていた。われわれがここで言及しているのは、イスラムの伝統文化圏に属する北アフリカ及びレバント地方の国々で植民地支配後に起こった複雑な政治及びイデオロギー状況である。この地域の現在の混沌とした政治状況についてはここで詳細にわたって分析したり、それについての先学の研究に触れることはできないが、いくつかの興味深い側面を強調するにとどめておく。まず第一に、宗教熱心でない人々、つまり現代の生活様式に影響を受けた人々は言うに及ばず、いまだに宗教的メンタリティーから抜け出していない社会に強引に西欧のモデルを移植したことがあげられる。これは画期的なことであって、過去3世紀にわたってヨーロッパ各国で民主主義体制が採られるようになるにつれて、メンタリティーが宗教的なものから世俗的なものへと大きく変化していった状況の比ではない。第二に、社会の広汎な分野において、特に最も大衆的な分野において、民族国家の樹立を推進してきた指導者の合理主義的教条主義に対する反発という側面もあげられる。「上からの革命」を効果的に実行するために、指導者たちは演説に宗教性を持たせるという方法をとってきた。つまりコーランや預言者の詩編を政治的演説

の中で、都合のいいようにいつも引用してきた。これは大衆を動員する時、つまり大衆をコントロールする時に、指導者たちが利用してきた唯一の方法である。このようにして最も世俗的で合理主義的な支配者や指導者や政党までもが大衆のイスラムの信仰に頼るところが多かった。そしてイスラム教の何百という宗派が国教化されて、「宗教」組織が創設されるようになった。最も典型的なケースは植民地解放闘争後のアルジェリアである。しかし、ここで支配者の側によって宗教が国家によって利用されてきたことの反動として、伝統回帰傾向が熱狂的に民衆の間から起こってきた。これは「宗教的」原理主義の新形態を生じさせる原因となった。これは主に都市の周辺に新たにできた地域、特に伝統的、つまり尖塔（ミナレット）を持つモスクからはまったく別の、倉庫やガレージから「自然発生した」モスクの内部で生まれたもので、たいていはヨーロッパの大学の左翼学生仲間の若き指導者たちによって推進されてきた。これらの矛盾点は特に顕著な政治的混乱のしるしであり、イスラム文化圏諸国に程度の差はあれ、何らかの影響を及ぼしている。すでに述べた経済的矛盾と同様、この矛盾も地中海地域に限ったものではないが、この地域の現在の国内対立に特徴的なものである。

最も深遠なイデオロギー的側面において、キリスト教の伝統文化とイスラムの伝統文化を分け隔てている歴史的に根の深い偏見を指摘しなければならない。両者は歴史的には1300年もの間地中海地域を共有してきた。両者の間の対立抗争はイスラムが地中海地域に拡張を始めて以来、存在し続けてきた。何世紀にもわたって両者を隔てていた境界線は不動のものではなく、絶え間ない争い、侵略、略奪、征服及び領土回復の場であった。これらのできごととは地中海の西部では特にイベリア半島において、東部ではギリシア、バルカン半島、アドリア海沿岸諸国において顕著であった。スペインの領土回復が終わり（1492年）、ヨーロッパとアフリカを分かつ自然の分断線であるジブラルタル海峡によって、イベリア半島では、われわれがいま問題にしている民族間の深刻な分断は、他の地域に比べるとわりと解決されてはいるが、ギリシア、バルカン半島、アドリア海沿岸諸国においては民族対立がいまだに続いていることに留意しなければならない。

これら二つの偉大な地中海文化、つまりキリスト教文化とイスラム文化との間に存在する深いところでの一致点については後述するが、ここでは国家の物質的財産は洋の東西を問わず、一般的には異教徒を敵に回して武力に訴えて蓄えられてきたことを想起していただきたい。キリスト教の側にとって敵は常に「ムーア人」であり、この「ムーア人」は異教徒のレッテルを貼られ、人種偏見によって蔑まれてきた。このような態度は「南」の国出身の人々に対する時、ヨーロッパの諸国民の間にいまだによく見られる。一方、イスラム側にとってキリスト教は古くさい宗教であり、キリスト教徒は中世以来、自らの宗教を失ってしまった「不信心者」とみなされてきた。今日ではヨーロッパ列強によるさまざまな形態の植民地支配及び独立後も続いている実質的支配（経済的、政治的及び文化的）に対してイスラ

ムの地において社会の広汎な分野で強い反動が起こっている。そしてこの反動は昔からの反キリスト教主義としっかり結びついている。また逆に、マグレブ人やトルコ人移民はEC諸国の国民に蔑まれ、嫌悪されている。それが彼らに対する処遇にも見られる。それは彼らが貧しいからというだけではなく、人種差別的偏見によるものでもあり、この偏見はヨーロッパ人がイスラムの伝統文化に対して持っているものである。以上のことは領土回復やその他の対立抗争（例えば、19世紀に至るまで地中海で頻繁に起こっていた絶え間ない海賊行為。これはあらゆる島や沿岸部で起こっていたが、ムーア人によるものかキリスト教徒によるものかは定かではない）の時代を通じて古くから偏見が強固に根づいていたことを証明している。海賊行為については半ば朽ちてはいるものの、現在でも使用できる要塞が地中海のアフリカ沿岸部側にいたるところに見られ、そのかなりのものが砂漠と接しているということを想起するだけで充分であろう。

ここまで地中海文化圏に現存する対立抗争について概観してきたが、これから肯定的側面、この地域に居住する民族・国民の統合やバランスにかかわる面にも言及しなければならない。そのためには冒頭に発していた疑問、つまり「地中海文化というものはあるのか」という疑問と再度関連づけなければならない。この疑問に答えるためにはまず、すでに述べたひとつの重大な対立に言及する必要がある。前節でもいろいろな対立抗争について述べたが、次の対立点こそがすべての対立点の中で、地中海の政治状況において最も重要性を持つようになったのではないと思われる。その最も重要な対立とはパレスチナの地にイスラエル国家が建設されたことによって生じた抗争である。この抗争は公然と行われていて、イスラム教徒とユダヤ人との間に積年の憎悪が見られる。この抗争のために戦争が断続的に起こっていて、世界の列強が戦争に介入してきた。そのため世界の安全保障にとって潜在的な脅威になっている。この抗争やイスラム教徒と「キリスト教徒」（今日では「西洋人」または「ヨーロッパ人」と自称している）との間の前述の対立抗争を目のあたりにすると、三つの宗教に関連した三つの文化の間には克服できない断絶があるように思えるかもしれない。しかし、ここで考えてもみよう。もし、われわれが西洋の歴史、特に地中海沿岸におけるその起源を理解したいならば、これらの三つの宗教が共通の一本の幹、同一の神話象徴的構造、つまり世界の他の精神的文化的伝統とは異なる同一の歴史的文化的伝統に属するものとみなさなければならない。これら三つの宗教は共通の祖アブラハムに由来するものと明言しているし、聖なる書物（聖書とコーラン）の持つ重要性ゆえに自らを「聖なる書物を有する宗教（Religiones del Libro）」と呼んでいる。これらの聖なる書物は世界について同一のコンセプトを持っていて、その歴史やイメージや登場人物はよく似ていて、しばしば一致している。これらの三つの伝統文化は中世においては交流を持ち協力して、西洋文明の知的基盤を築いた。この知的基盤には厳密な意味での宗教的要素のほかに、古代ギリシア・ローマ文明の遺産（とりわけプラトン・アリストテレス体系）及びペルシアや近東を通じてイスラ

ムによってもたらされた貴重なアジアの諸文化が含まれている。イスラムの伝統文化は今日まで極東と西洋の間の橋渡しをしてきたが、何ものにもまして、今日でも「アラビア数字」と呼んでいる記数法（実はインド起源ではあるが）を西洋にもたらした。この他にも算術、代数、幾何学、音楽理論や現在の西洋文化の基礎となる諸科学をもたらした。ヨーロッパはこれらの学問をとりわけ中世のスペインを通じて学んだ。幸いなことに当時のスペインでは大学その他の学校において三つの伝統文化のそれぞれの知識人たちの間には協力関係があった。その例としてはトレドの翻訳家たちがあげられる。そこではユダヤ人とムーア人とキリスト教徒が協力し合っていた。地中海のあらゆる重要地点においても（コンスタンチノーブル、エルサレム、カイロのアル・アザハール千年至福大学など）同様な協力関係が見られ、西洋文化とその知的及び科学的基礎が生まれた。イスラム教徒とユダヤ人がヨーロッパの建設に際して持っていた重要性を評価できるようにするために、三つの顕著な貢献を例として想起しよう。第一に、ヨーロッパの言語すべてに存在するアラビア起源の単語の多さがあげられる。これは一般に考えられているようにスペイン語だけに多いのではない。第二は銀行業務で、第三は医学である。こちらはもっぱらユダヤ人の貢献による。以上、簡単に概観に触れてみたが、これだけでも三つの文化の基本的な一体性、地中海文化を深層に持った一体性を知ることができよう。地中海沿岸地域は政治経済的にさまざまな相違点によって分断されているとしても、この一体性は現代の世界においても見られるものである。これらの相違は地中海文化の起源及び基盤という点から見れば、潜在的には重大で危険なものであっても、表面的現象以上のものではない。

そういうわけで、地中海地域における一体性の欠如は経済優先の時代以前においては地中海の文化に由来するものではない。一体性の欠如はルネッサンス以来ヨーロッパによって進められてきた近代化のプロセスの結果、とりわけ 18 世紀啓蒙思想以来、深刻になってきた。啓蒙思想は世界及び歴史に関する新しい概念の基盤をなすもので、これによってヨーロッパは自らのルーツから距離を置くようになり、その結果地中海沿岸の兄弟国及びその文化からも距離を置くようになっていくのである。つまりそれはブルジョワ自由革命の論理的帰結によって惹起されたヨーロッパ植民地主義であり、この論文の冒頭から概略を述べてきた地中海地域の国家及び文化間の対立抗争を拡大する重要な要素であった。植民地時代においては地中海の南に位置するイスラム諸国をヨーロッパ経済に組み込む作業が確実に行われ、その結果、南の生活様式をも西洋化してきた。もっともこれは部分的なものであり、問題を残すやり方ではあったが。

ヨーロッパの文明化モデルは現在、全世界的に行き渡っているが、二つの主要要素に基盤を持っている。一つは市場経済の発展であり、もう一つは権利と自由（この二つのものこそが民主主義の原理であり、価値であるが）のシステムに基づく立憲代議制民主主義の採用である。このモデルをヨーロッパ以外の文化に適用したことのネガティブな結果の一つは時と

して「第三世界化」の名で呼ばれる社会学的現象であり、これは特に、今もなお貧困とヨーロッパ列強に依存している状況にある地中海東部及び南部の国にかかわるものである。経済のグローバル化によって、今では豊かな国が貧しい国と協力することが不可欠になっている。ECはそのメンバー諸国ともども、北アフリカ諸国との協力の必要性を繰り返し表明してきた。互惠的な関係を定義するのに“codesarrollo”（共同発展）という用語さえも作られた。しかし、この点について民間の反応はまだまれである。またEC諸国に真に「共通の」外交政策（石油権益の防衛とか、トルコ人やマグリブ人の移民の単なる制限などに限らない、それ以上の政策）を決定し、適用するとなると、ECには多大な困難がある。「共同発展」はイスラム諸国が民主的政体を持つようになることと無関係ではないし、諸国家の政策を調整し、ECとの対話チャンネルとして機能できる国家レベルを越えた組織、言うなればマグリブ・アラブ連合に発展していくこととも無関係ではない。これらのことはメンタリティーが変わらなければうまくは行かず、この道のりは困難であり遅々としたものである。また、ここでわれわれが問題にしているのはイスラム文化諸国全般にとって急を要する近代化だけではなく、これらの国に対するヨーロッパ諸国のメンタリティーの変化である。イスラム諸国の経済的・文化的・政治的疎外の問題は原理主義のような現象を生み出しているが、これらの問題は近代化のプロセスの直接の結果であり、近代化の負の側面である深刻な病理の症状であることをまず理解しておこう。歴史的理、文化的近親度、地理的近さ及び社会的・経済的発展度などから北のECの指導的国家と南のイスラム文化諸国の仲を取り持つことができるのは間違いなくヨーロッパ諸国の中でも南の国々（北側の中の南）、特にスペインである。特に地中海東部地域においてその影響力と仲介者の役割を十分に果たす能力があることをこれまで述べてきた。地中海東部地域においてはバレンシアやバルセロナからマルセイユやジェノバを通りローマに至るまで一連の都市がいわゆる「ラテンのアーチ」を形成していて、これらの都市が属する文化的・言語的及び宗教的（カトリック）共通性ゆえにこのように呼ばれている。「ラテンのアーチ」の一連の都市はヨーロッパの北部の諸国家とは異なっている。北部諸国家は地中海からは地理的にも文化的にも遠く、社会的・経済的にも発展の度合いが高く、宗教もプロテスタントである。スペインのケースはこの点において特に興味深い。というのは地中海南岸諸国にとって経済的・政治的発展のモデルとして何らかのやり方で寄与できるからである。スペインは長い独裁政治の後、専門家諸氏の一致した見解では模範的とみなされている漸進的かつ平和的方法で、遅ればせながらまた不完全ながらもヨーロッパ近代の社会経済的システムを採るようになり、最近になってやっと民主政体を制定したのである。

いずれにせよ地中海沿岸の文化を異にする地域間の接近という共通の作業には、まず第一にメンタリティー、価値観、生活様式及び歴史の相違を認識した上で、異文化を尊重する必

要がある。それには昔からある人種的偏見を捨てなければならない。そのためにはまず、ヨーロッパ諸国で今日もしばしば見られるアフリカからの移民労働者に対する人種差別的態度を改めることから始めなければならない。しかし残念なことに、この人種差別的傾向はここ数年のうちにかなり広がるものと予測されている。しかし、とりわけ地中海諸国の指導者、特に知識層において互いの文化の起源を想起することが重要である。というのは地中海こそ共通のルーツが存するところであるからである。